



「聖報歌壇」に就て

セードロ解

村上 拓未

短歌を研究する上に、とか
く總じの條件に於て余り恵ま

はりお互に忌憚の無い批評

をして居ない吾々は、やゝもす
るゝ井中の蛙に陥り、一人よ

がりに流れ易いものである。

是等の弊を避ける爲には、や
りて居る所であ

るゝ許されるならば、無論
私は他人の歌を許すとか添
削するとかの柄ではないけ

ど一個の短歌爱好者としての
仕合が必要がある。若し此の

点より許されるならば、無論
私は他人の歌を許すとか添
削するとかの柄ではないけ

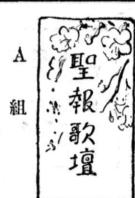
ど一個の短歌爱好者としての
仕合が必要がある。若し此の

点より許されるならば、無論
私は他人の歌を許すとか添
削するとかの柄ではないけ

ど一個の短歌爱好者としての
仕合が必要がある。若し此の

点より許されるならば、無論
私は他人の歌を許すとか添
削するとかの柄ではないけ

ど一個の短歌爱好者としての
仕合が必要がある。若し此の



A組

溢田不二夫
溢田春彦
溢田春彦

本の下陰の幕はしき頃
谷に向ふ人勤れる少し時折に廻
柔き芽の日増しに延びる作物
の姿いとほしく吾は見詰む

○風揚げの聲やみたるに來て
それが陽だまる砂に吾子は
眠れり

○體書して夜更の床にもぐる
我が足の冷たさ兒や醒めむ

○曇り日の寒き烟のアルモッ
ソ妻子、食す焚火をしつ

それは九月十日附の本紙に掲
載の物である。然し私は茲に
一々其の全部に涉つて書いて
居る暇はないので單に細部
に削受る又原作歌を併記す
る。さて私は最近の聖報歌壇に
本文の材料を求める事にする

○何事も歌には詠みし彼の君
は曾つて吾の詩無きと言ふ
○ひき

○季はすれの蟹一一つ窓近く飛
周ふも

○山焼の火道を切る若人等
○季はすれの蟹一一つ窓近く飛
周ふも